閑人閑語

膾(なます)を吹く

● 猪飼 國夫 ●

● ローマ人の物語

歴史認識という言葉がある．これがしばしば国家間の対立の原因となっていることはご存じであろう．では一体何をもって歴史認識というのであろうか．

例えば，2006年12月に塩野七生の巨著「ローマ人の物語」が15年の歳月をかけて「ローマ世界の終焉(しゅうえん)」をもって完結した．この書物は氏の古代ローマ史に対する歴史認識のみならず，氏が現代日本人に対して強く望んでいる歴史認識の持ち方を指し示していると言える．

塩野氏は，中野好夫や中倉玄喜の翻訳努力にも拘(かか)わらず，相変わらず理解しにくいEdward Gibbonの名著「ローマ帝国衰亡史」の「五賢帝時代」より前を主に語ることで，一田舎町のローマがなぜ世界帝国になることができたのかを解き明かしている．

なお余談であるが，Isaac AsimovによるSF古典の名著Foundationシリーズ（銀河帝国興亡史）はGibbonの著作にヒントを得ていると言われている．

● 個人の自伝では物足りない

歴史認識に弱いとされる日本人は，経営書として，この一種の創業史である「ローマ人の物語」をぜひ一読してほしい．

大部であることは事実であるが，同じく大部な歴史小説である山岡壮八の「徳川家康」や吉川英治の「宮本武蔵」を読んで経営感覚を養うよりは有効な気がする．なぜなら，いずれも各氏の畢生(ひっせい)の代表作ではあるが，歴史観という観点では「ローマ人の物語」に及ばないからだ．

もちろん，戦前の創業者である豊田佐吉や松下幸之助にしても，その生き方から学ぶ点はあると思われる．しかし，それらはあくまで個人の経験であり，作者によってある程度の脚色があったにせよ，個人の経験以上のものにはなかなかならない．

歴史観を養うにはまだ「太平記」や司馬遼太郎の「街道をゆく」のほうがましかもしれない．しかし，それなら筆者は本家である司馬遷の「史記」を勧める．できれば東西の歴史の記録として，「ローマ人の物語」と「史記」を併読したほうがよいかもしれない．

経験主義者：「これも熱いかな？」

● 技術屋にも歴史感が必要

技術の世界でも技術史という歴史が存在する．歴史を見ると，人間がやることは大体変わらないという感を強くする．

歴史観を持って見ると，「かつてIBMが進んだ道をMicrosoftも進む可能性が高い」とか，「世界を凌駕(りょうが)した日本の半導体製造各社の轍(てつ)を韓国の会社も踏む可能性がある」とか，いろいろと勝手な予測を立てることが可能である．

歴史観がない人は，仕事においても経験で物事を判断する．経験の伝承は「一子相伝」ではないが，親方から弟子へという形になりやすい．

また，経験はあくまでもその時々の情況や運と一対になったものであり，自分が直面した事態の解決に直接役立てるのにぴったりの経験はなかなか見つからない．

歴史とは，同時代的な多くの経験を整理して，個人の思惑や大衆の動向を加味した因果関係を掴(つか)み出したものと考えることができる．従って，歴史は多人数の経験の平均値のようなものである．同じような状況下では，いちばん確率の高い結論が記述されていると思ってもよい．

● 歴史を知る，それが騙(だま)されない秘訣(ひけつ)

日本の中学・高校の歴史の授業は，年号や人名・事件名を覚えることに偏っている．それが原因かどうか知らないが，歴史に学ぶことを好まない人が多い．手を替え品を替えて登場してくる同じような事柄に対しての理解が進んでいないのである．

すでに歴史的に結論がでているネズミ講などの投資詐欺被害が，2006年もIP電話を使った件で発生した．自分に経験がなくても，1,000万円以上のサーバで最大800人しか収納できないIP電話など，経営が成り立たないくらいは想像できるはずである．しかし，企業で営業や経営経験があるような人物までもが引っ掛かってしまい，たいへんな額の財産を失ってしまっている．

じつは筆者も1年以上前に，このIP電話への出資に誘われていたのである．どう考えても成り立たない話なので，誘った人に過去のこのような投資事件のことを話してお断りしたが，どうしても理解してもらえなかった経験がある．

歴史に学ばない経験主義の人のことを「羹(あつもの)に懲りて膾(なます)を吹く」注) とよく言うが，結果がすでに歴史的に分かっていることを，経験がないからといってあえて追試することはない．腐った卵はわざわざ食べなくても分かるのである．

いかい・くにお　博士（工学）

注：楚辞の屈原・九歌の惜誦に「懲於羹者而吹齏兮，何不變此之志也」とある．なお「齏」は“セイ”と読み“あえもの，なます”のこと．